

日本人は何故「文法」が嫌いなのか

— 「文法教育」再考の勧め

鈴木 聡

一般に「英文法」というと「難しい」「役に立たない」「受験のための英語」といった悪いイメージが付きまとう。しかし、日本語が世界最大の語族であるインド・ヨーロッパ語族—英語はインド・ヨーロッパ語族である—ではなく、英語が国際的な言語である以上、我々日本人が英語を習得するに当たり、体系的な英文法の知識を持つ必要があるのも事実である。だが、一般の方々はもとより、知識人、文化人と呼ばれる方々、中には専門の学者からも「文法(教育)は不要である」という意見を聞くが、何故日本人はこれ程までに「文法」ないし「文法教育」が嫌いなのだろうか。

私はその理由を「①日本人が古来からの独自の「文字」を持っていなかったこと ②日本は地理的条件から外国からの植民地などになったことがない(自国の文化を喪失したことがない) ③日本人は他国の文化を取り入れることで独自性を出そうとする民族」だからだと考えている。これはどういう事かというところ、まず①だが、周知のとおり、日本は中国から「漢字」が輸入されるまで「言葉」はあっても「文字」は存在していなかった。つまり、体系化された「文法」というものがなかったのである。そのため、日本で最初に体系化された「文法」は自国語の「文法」ではなく、中国の漢詩や漢文を学ぶための「漢文法」である。日本語に関する「文法」が出始めるのは賀茂真淵らをはじめとする江戸時代になってからである。だが、賀茂真淵らが研究対象としたのは、実はその時代の言葉ではなく、記紀万葉(古事記、日本書紀、万葉集)から始まり、平安、鎌倉時代等の「古典」に関する「文語文法」であった。そのため、日本人の「文法」に対するイメージの大半は「文語文法」である。実際、本格的な「口語文法」は大槻文彦、山田孝雄、橋本進吉、時枝誠記といった人物が登場する明治以降まで待たなければならなかったのである。

ところが、現代の国語教育では(漢詩・漢文のための「漢文法」を除く)「古典」のための「文語文法」は行われているものの、現代日本語の「口語文法」の指導はほとんどされていないのが実状である。それに、そもそも漢文法ができたのは宮廷内の立場を上げる—つまり出世する—ための道具として必要であったので、関係なくなった現在では見向きもされないのが現状である。従来、唯一日本語の文構造に関係してきた科目といえば一皮肉なことではあるが—英文法の授業だけだったといっても決して過言ではないだろう。では、何故これ程までに日本人は自国の「口語文法」に興味を示さなかったし、示さないのだろうか。それは、②に挙げたように、日本は世界の歴史上でも稀な外国に侵略されたことのない民族だからである。日本が外国から侵略されなかった理由の1つとして、日本は四方を海に囲まれた島国であり、太平洋側の国からは遠く、比較的近い日本海側からも波が荒く航海をするには適していなかったこともあるのではないかと(私見ではあるが)思われる。事実、日本の歴史上で外国からの侵略戦争や脅威となったものは「蒙古襲来」や「黒船来航」だけである。その他に第二次世界大戦の敗戦による「連合国軍統制管理」などもあったものの、いずれも日本語をはじめとする日本文化を崩壊するところまで行われていないのである。そのため、我々日本人にとって「自国語を話す」という事は、「空気」や「水」のようにあたりまえの事として、受け取られているが、他の国では必ずしもそうではない。国によっては、「自国語を話す」権利を獲得するためだけに、何世代もかかり、血を流し、やっとの思いでその権利を獲得した民族もいるのである。

英語とて例外ではない。英語も1066年のNorman Conquestにより、土着のイギリス人貴族は全て排除され、上流階級はフランス語を、下層階級は英語

を話すという二重言語(bilingualism)の状態¹となった。英語がイギリスにおける公式言語になったのはそれから296年後の1362年の訴訟法の成立まで待たなければならなかった。しかも、英語が法律の書き言葉として認められたのは、それから126年後の1488年の事であり、さらに法律が英語でなければならなくなったのは、そこから243年後の1731年²である。つまり、イギリスは自国の法律を自国語である英語で書く事に決定するまでに、1066年のNorman Conquestから数えて実に665年もかかっている³のである。それだけではない。1586年にWilliam Bullokarによって出された最初の英文法書であるBref Grammar for Englishは「英語にもきちんとした文法がある」という事を、諸外国に示すために、当時イギリスで広く使われていた“The Royal Grammar”(欽定ラテン語文法)をもとに作られたもの⁴であることから、いかに自国語の立場を確立しようと必死になって努力しているかがわかるはずである。その他の例として、ポーランドは1772年からプロイセン(現ドイツ)、オーストリア、ロシアによる領地「分割」が始まり1795年には一時国が滅びるといふ「分割」時代⁵を、マレーシアでは「五・一三事件」⁶を経験しているし、南アフリカ共和国では1976年にかつて白人政府が黒人の学校教育にアフリカンス語—南アフリカ共和国で行われていた人種隔離政策の強硬派とされるアフリカーナーの母国語—を導入しようとして猛烈な反対デモが起こり、それが全国的な大暴動(ソウエット蜂起)にまで発展した⁷経緯もある。フィリピンでも、1988年9月にアキノ大統領が政府省庁間で取り交わされる公文書は今後フィリピーノ語を使用する事が望ましいという見解を公にした翌日に、セブ州知事が同州政府の公文書は全てセブアノ語で起草すべしという声明を発表したこと⁸からもわかるように、本来、言語と民族意識は連動したものなのである。このことは、次のインドに関する記述からもそのことがわかるはずである。なお、下線部はすべて筆者によるものである。

「多言語・多民族の連邦制国家インドでは、各州が別個の公用語をもつ、各民族の独自の政治的、文化的発展を掲げた言語州要求運動は植民地時代から展開され、独立後1956年に言語州創設が実現さ

れた。ただボンベイ州は大商工業都市ボンベイの帰属が争点となり、マラーティー、グジャラーティー両語を持つ二言語州のまま残された。しかし、多数の生命の犠牲を出す大衆運動の末、60年によ
うやく二つの州に別れたのである。(内藤雅雄著「マラーティー語」 p26 『世界のことば』より抜粋、朝日選書)

幸運にも、日本は自国語の存亡に瀕したことがなかったために、過去に志賀直哉の「フランス語論」や三年前に話題になった「英語公用語論」などが起こっているが、本来は自国語の「文法教育」から言語教育というものは始めるべきものである。事実、どの国でも、Grammar, Composition, Writingと名称は変わるかもしれないが、自国語の「文法教育」を先に行っており、日本のように自国語の「文法教育」を行う前に外国語教育を始める国は珍しいぐらいである。最後に③だが、この事については国語学者・言語学者として著名な学習院大学名誉教授大野晋氏の興味深い文があるので、以下にそれを紹介しよう。なお、下線部はすべて筆者によるものである。

大野 僕は「日本語＝タミル語起源説」を唱え続けてきましたが、タミル語という言葉だけが来たのではないのです。あれは米、金属、機織りとともに来たのです。この文明複合体は、当時としては圧倒的な力を持っていたんですね。今のインターネットなどと同じで、猛烈な文明だった。だから、日本人はそれについていって、消化したいと考えた。結果、そのモノの単語や文章をはじめ、「係り結び」も、五七五七七も覚えて、全部そこへ巻き込まれたんですね。それが弥生時代。

鈴木 なるほど。

大野 次は朝鮮語、高句麗の文明でした。日本語の「郡」は朝鮮語のコボリこおりと同じだし、税金を取るという単語の「る」は朝鮮語「pat(パッ)」です。数詞でも三つ、五つ、七つ、十など高句麗から来たのが残ってる。郡とか徴税という単語が入ったということは、彼等が行政権を握ったということじゃないですか。これが古墳時代でしょう。その後、中国文明とともに来たのが漢字です。つまり、日本ではタ

ミル文化が来ればタミル語になり、朝鮮文明が入ると朝鮮語を取り入れ、中国文明が強くなると漢字を学ぶようになる。こんな具合に、歴史的にみると、日本では文明の後に言語がついてくるんですよ。江戸時代には、ヨーロッパへの窓口だったオランダ語を必死になつて習った。オランダ語の字引を人から借りて徹夜して書き写したりね。

鈴木 その話は『福翁自伝』に出ていますね。

大野 戦後は、マッカーサーの憲法を訳したじゃないですか。日本は昔から時代時代に適応しながらやって来た。

鈴木 現在の目標はアメリカというわけですね。古代においては唐であり、近代は西洋であり、今はアメリカ。

大野 そうです。アメリカ文明が強ければ、それに適応してアメリカの言葉を入れようとするんです。ところが、民主主義でもそうだけど、日本では根本から大変化が起こるわけじゃない。アメリカの民主主義を支える、一人一票ということの意味について日本人は考えを深めていくようにはならないんですね。適応ですから、一見、それに似た何かになればいいんですよ。日本では、また、そういうことには高い能力があるんだな。だから、明治以降、一所懸命に働いてヨーロッパに追いついたんです。一大野 普・森本哲郎・鈴木孝夫共著 (2001) 日本・日本語・日本人 新潮選書 pp20-22

これを見てもらえばわかるのだが、日本は昔から、独自性というものを持たなかったため、他国の文化を積極的に取り入れることによって独自性を出そうとして来た。そのため、漢文やオランダ語、そして英語のように時代時代に必要とされるものに対しては一どちらかという立身出世のために一文法を研究するのだが、必要性のないものに関しては言葉の中には取り入れられるものの文法研究つまり文法書を作る一は一切なされていない。まして、常に外来文化を摂取することだけに慣れすぎたため、現在でも自国の(言語・文法を含む)文化についての認識が低いように思われる。

冒頭にも述べたように、日本語は英語を含む世界

最大の語族であるインド・ヨーロッパ語族とは全く異質な言語である。故に、英語を習得する際にはきちんとした体系的な「文法」に関する知識というのは絶対必要不可欠なはずである。だが、日本では自国語における体系的な「文法教育」が行われていないために、「文法教育」に対して必要以上に批判的な考えが多すぎるようである。生徒・学生の英語力の低下が叫ばれている今日、いたずらに「文法教育」を批判するのではなく、「文法教育」の効用というものも再考する必要があるのではないだろうか。是非、諸先生方に切に御教授願いたい次第である。

注

- 1 渡部昇一著 英語の歴史 p165, 大修館書店 1983
- 2 渡部昇一著 英語の歴史 p174, 大修館書店 1983
- 3 渡部昇一著 英語の歴史 p175, 大修館書店 1983
- 4 渡部昇一著 英語の歴史 p263, 大修館書店 1983
- 5 沼野充義著「ポーランド語」p106,『世界のことば』所収 朝日選書 1991
- 6 小野沢純著「マレーシア語」p6,『世界のことば』所収 朝日選書 1991
- 7 桜井隆著「アフリカンス語」p98,『世界のことば』所収 朝日選書 1991
- 8 寺田勇文著「タガログ語」p9,『世界のことば』所収 朝日選書 1991

参考文献

- 渡部昇一著 『スタンダード英語講座 [3] 英語の歴史』 大修館書店 1983
- 朝日ジャーナル編 『世界のことば』 朝日選書 1991
- 大野普・森本哲郎・鈴木孝夫共著 『日本・日本語・日本人』 新潮選書 2001

(鳥羽商船高等専門学校講師)